

夢の國旅行

よしを 作

(一) 頂いた梨

太郎さんは幼稚園から歸つて來ました。もう三時近くなんでせう。お母さんは、

「坊や、今日は大變おそかつたのね。」

とおつしやつた。けれども太郎坊は、

「今日はお迎ひも誰も來ないのですもの。僕一人で歸つて來たんですもの。つぎやはどうしたんですか？ でも先生が自分のことは一人でなさいとおつしやつたので、僕一人で歸つたんですよ。」

「さう、坊やはよく一人で來ましたのね。つぎやはお父さんの所にね、急に御用が出來たものだから使にやつたんですよ。何か他に用でも出來たと見へて、お迎ひの間に合はなかつたのですよ。でもよく一人で來ましたね。お隣の花子さんのお迎ひと一所に來るかと思つて居たんですよ。」

「花子さんはね、お女中と三越へ行つたんですもの。僕一人で來たんですよ。」

「花子さんは一緒に行きませうと云つたけれども、僕、お母さんが待つてゐるから、一人で歸ると云つて歩いて來たんですよ。」

「さうですか、坊やはよく來ましたね。ほんとうに！」

お母さんは、太郎さんが一人で歸つて來たので大變嬉しがつて居ます。もう坊やは一人であの遠い幼稚園から一人歸れたかと思ふと嬉しくてなりません。もう三時近くだ、何か坊やにやるものはないか知ら！

お母さんは、つと御勝手の方へ立つて行かれました。歩いて居る中にも母は「あの三十町もある遠い所から電車にもならず、坊やは歩いて來たのか、自分もつと早く迎に行つてやればよかつたにと思つたが、衣物が仕掛けてあるものだから、よく行かなかつた。誰れかと一緒に來ると思つて居たのが間違ひであつた。けれどもよかつた、坊やは一人で怪我也せず歸れてよかつた。」と云ふ様なことを考へて居た。それで今朝方静岡から頂いた梨を坊にやらうときめた。そして大きなのを二つ三つ持つて來て、

「坊やが今日一人で歸つた御褒美に、今朝方静岡から頂いた梨を坊に上げませう。」

とおつしやつた。太郎さんは嬉れしさうな話をして梨を見ると、大きいこと、大きいこと、實にすばらしく大きい。太郎さんは思はず、

「お母さんありがとう。皆頂けるの、一つはお母さんに、一つはお父さんに、赤ちゃんは小さいからおつばい。」

と叫び立てた。するとお母さんは、

「皆んな坊やに上げますよ。お父さんのはまだ他にありますから。お歸りになつたら、お母さんはお父さんと一緒に頂きますわよ。」

とおつしやつた。太郎さんは三つ、自分の顔より大きな梨を頂いて、ニコニコ顔です。お母さんは太郎さんの一つむいて上げました。太郎さんはおいしさうな、水のしたよるやうなのを瑞から、おいしいおいしいと云つて頂いて居ます。

とうとう太郎さんは、大きなのを一つ平げて仕舞つた。お母さんはさも満足さうな顔をして、一生懸命に着物を縫つて

居られます。

太郎さんは、

「お母さん。僕もうお腹一杯ですよ、お父さんの御歸りまでしまつて頂戴。」

と云ひながら、今日楽しく遊んで来た幼稚園の遊戯のことを考へ始めた。すると、三十町の長い道を歩いて来た疲れが出て、太郎さんはとうとう、コクリコクリ眠り始めました。お母さんは風を引いてはいけないと云ふので、太郎さんにお蒲團をかけてやりました。

(二) 山中の仙人

太郎さんが幼稚園の事を考へて居る中、ひよつとあたりを見廻はすと、紅や黄に染つて居る綺麗な山が見へる。あゝなんといふ奇麗な山だこと。水も綺麗だ。底まで見へる。「どうして自分はこんな所に来たのか知らん。」と考へたが分らぬ。唯眼に見へるのは谷川の岸に咲いて居る綺麗な桔梗、カルカヤ、女郎花ばかりである。一つ取つて来て隣りの花子さんに上げませう。僕のお室へも挿しませうと考へながら、川の堤に添うて、太郎さんは山の方へ、山の方へと行くのである。

太郎さんは、花を取るので一生懸命です。川の上へ行けば行くほど、綺麗なのが咲いて居ます。夢中になつて花を取りながら川上へ上つて行きます。ふとあたりを見ると、もう自分は紅や黄の木の林に來て居るのです。

「あゝ綺麗なこと。」太郎さんはこう云ひながら、取つた花の綺麗さと見比べるのです。その中にどこからともなく風がそよそよ吹いて來てよい氣持です。その中に林の中の草が何だかガサガサと音がして來て、誰れか人の來るやうな氣がします。太郎さんはひよつと顔を上げますと、それはそれはまつしるな髪の毛をした、お鬚が地面までつくほど長い、顔のま

つかな老人が一人立つて居ます。

「太郎さん。何して居るの。」ときくのです。太郎は、

「僕、花子さんにやつたり、自分のお室にさす花を取つて居るの。」と答へた。すると件の老人は、

「それはそれはよい心掛だ。自分一人のためでなく、花子さんにも！ 太郎さん一寸ここまでお出でよ。口の廻りに何だか黄色いものがついて居るから、とつて上げやう。」と云ふ。

太郎さんは、おとなしく側に行つて顔を出した。すると老人は長い爪した手で太郎さんの口のまはりをなで、呉れた。その間にも太郎さんはかう考へました。あんなに長い爪が、まるで牛の角の様な爪が顔にあたつたら、顔が二つにさけて仕舞ふかと思へば、時々顔を後へのけずには居られません。ビクビクものであつたが、とにかく老人に口の廻りをさすつて頂きました。太郎さんは、

「おぢいさん何に！ 僕の口のはたに何がついて居たの？」と聞きながら、老人の顔をつくづく眺めて居た。すると、老人は、

「女郎花の花粉でせうよ。」

「さう、女郎花の花粉！」

さう云ひながらも、太郎さんは老人の顔をつくづく見て居るのである。すると、どうした事か？ 老人は口のまわりを自分で二三回撫でたかと思ふと、その口が段々のびて来て天狗さんの鼻と間違へるほど長くなつて来ました。おかしいではありませんか。その口が鶴の口バシの様に真中から二つに割れるのですよ。さあ、これを見た太郎さんはビククリして仕舞ひ、逃げ出さうとすると、老人は聲をかけて、

「太郎さん。そんなに逃げなくてもいいよ。君だつて、俺の様な口になるのではないか。君の口を手で二回さすつて延し

て御覽。」

と云つた。太郎さんは本當かと思つて延して見た。すると不思議ではありませんか、太郎さんの口も老人の様に、グングン伸びて、天狗の鼻をたてに割つた様な形となつた。すると老人は太郎さんに、

「君！ わしのする通りにして御覽。」と云つて、老人はその長い口で紅や黄色に染めた林の空を「フツ」と吹いた。

どうです。驚くではありませんか、木に止まつて居る鷺も、カラスも、スッメも、木について居る紅や黄の木の葉も、皆嵐に會つた様に吹き飛ばされて仕舞つた。空高く飛んで居る鷺まで吹き飛ばされて、どこかへおつこちた様です。太郎さんも息を一杯すひこんで、老人の眞似をして「フウツ」と吹くと、木の枝や幹まで、嵐の黄風にゆられた様に大ゆすれです。

こんどは老人が、その長い口ですつと息をすひ込むと、さきに吹き飛ばした木の葉や鳥まで老人の足元に皆集つて、そこは非常にうづ高い木の葉の岡になりました。太郎さんや老人は、その木の葉の中にうまつて仕舞ひました。それで二人はやうやくにしてその木の葉の岡の上に這ひ上りました。その老人は太郎さんにも、息をすつて見なさいと云つたので、その通りすると、さきに飛ばした木の葉や、木の枝や鳥まで皆足元に來てヒラヒラして居ます。鳥なんかは魔法にかゝつたかの様に、眼をキョトキョトして飛んで行かうとはしません。

こんどは老人が川の方へ行つた。そして大きな岩の上に立つた。そして、太郎さん太郎さんと呼んで呉れます。それで太郎はそちらの方へ行きました。すると件の老人は、その長い口を深い水の中に入れて、何か挿して居る様です。その中にその長い口を水の上にあげますと、大きな鮎が二十四も、三十四も、その長い口に挿まれて居ます。太郎さんは面白くなつて、

「おぢいさん、ぼくにも教へて頂戴。」

と云ふと、老人は親切にその取り方を教へて呉れました。その上大切なものが深い川に落ちた時には、口を長くして挿かすとすぐ口で取ることが出来るかと教へて呉れた。

それで太郎さんは、教はつた通りやつて見やうとしました。するといつの間にか老人は川の岸へヒョイと行つて仕舞つた。太郎さんが、

「おぢいさん、待つて下さい。」と云ふと、その老人は「その口で君の足を吹け。」

と云ふのです。それで云はれた通りすると、太郎さんの身は山の頂山より高く舞ひ上がつて、その老人の所にフワリと落ちて來た。それを見た老人は、一人で、

「よろしい、よろしい。」と云つたか云はぬ中に、

「君、君の口を君の手で三遍左にまはして撫で給へ。」と云つた。それで太郎さんは云はれた通り、口の廻りに手をやつて左の方へ廻しかけると、その老人はどこへか消へて行つて仕舞つた。

(三) 家の人々の驚き

どこをどうして來たのか、太郎さんは家へ歸つて來て居ました。お母さんはお勝手に何かしていらつしやる様です。するとどうした調子かしらぬが、大事な大事な指輪をおかあさんが、大きな水ガメの中にお落しになつたのです。もう夕方なのでどうしても分りません。お母さんはアレどうしようかしら！ と云つて困つて居らつしやる。

すると太郎さんは、それを聞いて、

「僕、取つて上げやう。」と云つた。

「なあに、僕なんかつて云つたとて取れるものですか。」

「いゝえ、お母さん、僕きつと、とるよ！」

「取れるものですか。」

等と云つて居る中に、太郎さんは自分の口のまはりに手をやつて、二三遍まわすと、口が、長く長く、天狗の鼻を、たてに割つた様になつた。そしてその長い口を水ガメの中に入れると、初めてお母さんはそれを見て、驚いたの驚かないのつて、

「あー、あれ、坊や、なんですか。」

と云つて居る間に、太郎さんは、お母さんの指輪を長い口で拾ひ上げた。お母さんは喜ぶやら、驚くやら、大變です。

お父さんも出て來た。そしてその口を見ると驚いて仕舞つて、お醫者を呼んで來て切つて貰はなくてはと云ふ、太郎さんは落ついたものです。

「お父さんや、お母さん、この口はまた元の通りになるのですよ。」

「何元の通りになるものですか。お醫者に行くのですよ。」と云つて、お父さんやお母さんは半分泣き顔して居らつしやる。太郎さんは又老人に教はつた通りに、三遍口のまはりを左にまわしながらなでました。すると元の通りになつたので、お父さんやお母さんはやつと安心しました。

日が暮れて夜になりました。夜になると、何時もフクロウが庭の銀杏の木に來ては、

「ホウホウ　　ホウホウ」

と鳴きます。此の鳥が來て鳴くと、何時も赤ちやんが泣き出します。お母さんの一番困まるのは、この赤ちやんの泣き

出すことなのです。

太郎さんは又一つお母さんを驚かしてやらうと思つて、口を伸ばして、フクロウの鳴いて居る銀杏の木に向つて、息を思ひきり吹きかけてやりました。すると銀杏の木の葉は皆散つて高く空に舞ひ上がり、フクロウは「キヤツ」と云つたかと思ふ間なく、どこかへ吹き飛ばされて仕舞つた。隣の御家では嵐だと云つて大喧ぎをして戸をしめたり、乾し物を入れたりして居ます。道を通る人は旋風だ旋風だと云つて騒いで居ます。太郎さんはソツト口のまわりを三遍左にまわして撫で、平氣な顔をして居ます。もうそれからフクロウは一聲も鳴かなくなりました。それを見て居た家の人たちは、まあそれはそれはほんとうに驚いて居ました。

(四) 太郎さんの空中旅行

そうして居る中に夜は明けて、あすの朝になりました。太郎さんは顔を洗つて御飯を頂きました。そして通りに出て見ると飛行機が空を飛んで居ます。自分も一つ飛んでやらうかと思ひながら、老人に教はつたあの術で口を長くして、足元をフットやると高く高く天に舞ひ上がりました。

天に舞ひ上がった太郎さんは、東京を真下に見下しながら考へた。こんな所に居ても一寸も面白くはないや。お父さんがおつしやるには、西の方で支那が戦争をして居ると云ふ事だ。一つ見て來やうと思つて行かうとした。さてよ、西の方つてどちらか分らぬ。何でも幼稚園で先生がこんな事を仰つたのを覚えて居る。

「今では日本も大分大きくなつたので、汽車の通る鐵道を西へ西へと行き、下ノ關と釜山とか云ふ所を鐵道省の連絡線で渡り、日本の鐵道で朝鮮を横ぎり、そのまゝ支那の奉天と云ふ所に行けると。」

よし、鐵道のまん上を西へ西へと行かうと思つて、太郎君は空中を西へ西へ鐵道に沿ふて行くのである。おや横濱の空

へ来たぞ。おや、金のシヤチが見えるぞ。あれは名古屋か？

おや大きな湖、綺麗な山や、お寺の澤山あること。あれは琵琶湖か、これが京都か、よい所だな。

太郎君は鐵道に沿ふて、だんだん進んで行きます。

「おやおや、どうしたんだ。煙くて眼が開けられない。これはどこだ大阪か？」

太郎さんは飛行機より早いです。もう下の關に來ました。こゝから西北へ飛びましたら、まもなく朝鮮釜山の空を飛び朝鮮の都城から、とうとう鴨綠江と云ふ日本一の大きな河の空に來ました。こゝから西がよいよ支那の土地である。

戦争はして居ないかなあと思つて下を見たが、中々戦争は少しもない。もう一息かと思つて太郎さんは一息に西北へと飛びました。そして下の方を見ると、

「やあ、やあ、兵隊が居るぞ、一寸日本の兵隊と違ふな。」

「やあ居る居る、どこへかつれていかれるのだな、いくぞ、いくぞ、どこだな。」

「うむ、西南の方へ行くぞ行くぞ、そつと空から見てやれい。」

「おやつ、日本の兵隊も居るぞ、何をして居るのかな、あ鐵道の側にはかり立つて居て。」

「支那の兵隊は、どんどん西南の方へ行くなあ。」

「よし、僕も空からついて行かう。」

太郎さんは、山海關と云ふ所の空まで飛んで行つたのです。太郎さんが下を見ると、戦争をして居るは、して居るは、中々えらい元氣でやつて居る。これを見た太郎さんが何でぞつと我慢が出來ませうか？

(五) 太郎さんの魔術

太郎さんは、先づ北東から大砲を撃つて居る軍隊の方へ来ました。そして誰れが大將か聞きました。すると支那の兵隊さんは此方の方の大將はツアンツォーリンです。今此方の方が勝つて居るのですよ。と支那の兵隊さんは大いばりです。その中に敵の方から毒ガスの弾を撃つて来ました。太郎さんの前の方で働いて居る支那の兵隊は、ごろりごろり倒れて仕舞ふのです。こんどはどうやら太郎さんの居る所があやふくなりました。太郎さんは早速老人から教はつた術で、口を延ばして一吹き「フウツ」とやりました。すると此方に飛んで来た毒ガスの弾は、撃つた方へあべこべに飛んで行つて爆發しました。向の方の大將は不思議がつて居ります。毒ガスでも利き方が薄いので、澤山な兵隊をして攻めさせました。それを見た太郎さんは又大きな口で一吹き「フウウツ」とやると、攻めて来た兵隊さんはどこへか吹き飛ばされました。これを見て居たツアンツォーリンの兵隊は、太郎さんをすつかり神様だと思つて、傍に寄つて來ません。遠くから拜んで居るだけです。

この様に敵兵が吹き飛ばされたのですから、日本の兵隊さんならすぐに突貫するのですが、支那の兵隊さんは中々突貫しません。それで太郎さんはすつかり氣を腐らして、長い口で足をふいて又天に舞上つて、今度は西南から攻めて來る兵隊の所へ行きました。そして傍の兵隊さんにお前の方の大將は何と云ふかと云つて聞きますと、支那の兵隊はウウペイフウと云ひました。

太郎さんはあまり名前がおかしいので、何遍も何遍も、ウウペイフウか、ウウペイフウかと云つて繰返しました。仕方が無いウウペイフウでもウスツペイフウでもよい。此處で戦争を見て居やうと云ふと、支那の兵隊さんたちは、こゝは大砲の弾が出て危いから、すつと後へ行けと云ひます。けれども太郎さんは「なに大丈夫だ。日本男子だ。」

と云つて威張つて居ます。その中に大きな大砲の弾が來て、四十間位向ふの所で爆發しました。支那の兵隊さんたちは皆

小さくなつて仕舞ひます。それでも太郎さんは口を長くただけで一向平氣なものです。その口の長いのを見て、支那の兵隊さんが驚かないの、何のて、大變な驚き方であつた。

その中に上の方に、ツアンツォウリンの方の飛行機が来て、爆彈を投げ始めました。支那の兵隊さん達は皆んな青くなつて逃げ支度です。それでも太郎さんはどんなにして爆彈を落すか見てやれと云ふので、ちつと見て居ました。すると、その飛行機は丁度太郎さんの眞上に飛んで来て、一つ大きなやつを落して行きました。爆彈の口火は火をふいて居ます。それを見た支那の兵隊さんはチャミ上つて居ます。

太郎さんは爆彈が頭の上に着ちてはと思つて、例の長い口一杯に息を吸ひ込んで、勢よく「フウウツ」とやりました。すると落ちて來た爆彈も、その飛行機も皆どこかへ吹き飛ばされて仕舞ひました。

その中に滿洲の騎兵が太郎さんの方へ攻めて來ます。見る見る中に太郎さんの身の近くに攻め寄せました。そして太郎さんの方へ向つて、あいつ昨日まで僕たちの側に居た奴だ。捕虜にせいと云ふので、太郎さん目がけて突進して來ます。太郎さんはこれを見るなり、此の時だと云ふので、一息吸ふて思ひきり吹き飛ばすと、その騎兵たちはまるで嵐に木の葉が飛ぶやうに、キリキリ廻つて向の山へ吹きつけられました。太郎さんの傍に居る支那の兵隊さんたちは、これを見て眼を廻して死ぬものもありました。太郎さん一人目がけて來た騎兵が、どうした譯か向ふの山の方へ吹きつけられたのを見て、腰をぬかしたが、ウウ　ベイ　フウの兵隊さん達も思ひ切つて突貫しません。

これを見て居た太郎さんは、頼み甲斐ない兵隊さん達と思ひ、何時までこうして居てもきりの無い事だと思ひ、敵味方の丁度眞中と思ふ所へ、足元を吹く術で一氣に飛んで行きました。こんな睨み合ひの競争なんか止めさせた方がよいと云ふので、太郎さんはそこから、兩方の軍隊向けて得意の息を思ひ切り吹きかけてやりました。

すると、ツアンツォリンの兵隊も、ウウベイフウの兵隊も、皆んな滅茶滅茶になつて、どこかへ吹き飛ばされました。

それでもう弾は来なくなつた。しかし太郎さんも、こんなに同じ國に居ながら喧嘩をするものゝ心が知れぬ。一つ誠めてやれと云ふので、東を向いて息を一息スウツと吸ふと、ツアンツオリンが頭をコブだらけにして來ました。

こんどは西の方を向ひて一息フウツと吸と太郎さんの足下に、ウウペイフウが頭をコブだらけにして飛んで來ました。それで太郎さんは幼稚園の先生から聞いた通り、同じ國に居る兄弟のくせに、喧嘩してはいけないと云つて叱つてやりました。

そうすると、ツアンツオリンもウウペイフウも、太郎さんの云ふことがほんとうなので、兩人とも

「太郎さんありがたう、もう決して同じ國に居る兄弟で喧嘩はしません。」と云ひました。それで太郎さんが、
「お前たち二人は……………」

と云ひかゝりましたら、お母さんが、太郎や、もう夕御飯ですからと云ふ大きな聲が耳に入りましたので、太郎さんが眼を醒ました。